

〈書評〉

河内良弘著『満洲語文語文典』を読んで

早田 輝洋

0. はじめに

今まで満洲語を講じるとき、清朝時代の文典を用いるかロシア語なりドイツ語・フランス語なりで書かれた文典を用いるしかなかった。それでさえ不満なのに、今の一般の大学生の実状では、ドイツ語・フランス語・ロシア語の文典は使えない。漢語で書かれた文典も一般的ではない。英語のものといってもメレンドルフは使いものにならない。いきおい、河内氏もそうであったように、自分であちこち寄せ集めて簡便なものを編集したりする他なかったのである。そういう時に初めて近代的な文典（河内良弘著『満洲語文語文典』、京都大学学術出版会、1996年2月、助編者として清瀬義三郎則府氏と愛新覚羅・烏拉熙春氏の名があげられている）が世に現れたということは真に慶賀すべきことと言わねばならない。

著者の言「日本人には日本人による日本人のための文法書があったほうがよいにきまっており、その編纂適任者はといえば、満洲語を研究する日本の言語学者でなければならない。とはいっても、……いくら待っても誰にも書いてもらえない。」(vi)したがって歴史学者が書いた、というのは、どんな言い訳があるにせよ言語学者の怠慢と言わざるを得まい。言語学者の末席をけがして満洲語も扱っている身として、本稿の筆者も大いに恥入る所である。

術語の英語訳が附されたことは、読者それぞれの文法的観点により様々な意見があろうが、筆者としては、やはり歓迎すべきことと考えている。

助編者をいれて事実上複数の著者が関与していることは、当然良い面と若干の矛盾した面が出てくるが、これも一つの行き方であろう。

細部に関しては誰しも色々言いたいことがあるだろうが、こういうものが出来てこそ徐々に改良発展させていくことが可能になる。本書を契機に満洲語学・満洲語

研究の一層の発展が期待される。

以下、河内良弘氏とお二人の助編者清瀬義三郎則府氏と愛新覺羅・烏拉熙春氏を含めて「著者」と呼ばせて頂く。本稿を書いている早田は「筆者」としたい所であるが、「著者」と紛らわしくもある故、敢て「私」とさせて頂く。

本書は大略以下の5篇よりなる。

1. 文字・発音篇
2. 文法篇
3. 読本篇
4. 満洲語小辞典
5. 索引

以下、私の興味に任せてかなり恣意的に、ほぼ上述の順を追って述べさせて頂く。本書の資料は、『満文老檔』『満洲実録』『異域録』『ニシャン・サマン傳』種々の檔案類その他実に広くから採られているが、私の多少とも丁寧に読んだ大量のものというと、『崇禎本金瓶梅』の満洲語訳と考えられる『金瓶梅』（以下略称して『満文金瓶梅』）に過ぎず、特に檔案類については何も知らぬ故、本書から教えられることが非常に多かった。以下の僭越な言には見当違いのものが多々あることを恐れている。

1. 文字・発音篇

文字・発音に関しては、私はかなり違う意見を持っている故、一般的には差控えるが、若干の点について述べさせて頂こう。

語中のte, ti, tuのtやde, di, duのdの書き方・筆順は、よく間違えられている故、触れておいた方が親切であろう。但し現今の錫伯族の書き方と、蒙古人の書く満洲文字の書き方とで違いがあるようではある。

1. 1 音声記号表記の問題

[]で括った音声の表記は、国際音声字母(IPA)に限定した方が混乱が避けられる

と考える。

55頁以下の「特殊子音」すなわち *tulergi hergen* の説明中に、例えば64頁に、*sy* は北京語の拼音の「[si]の音をしめす」と書かれ、すぐ下に「満洲語文語の発音は[su]」と国際音声字母が[]中に記されている。これでは北京語の拼音と音声学の両方の知識を持ったものでなければ、訳が分らなくなるのではなかろうか。北京語拼音表記を[]の中に入れるのは誤解のもとであろう。

62頁の「*ž*は」北京語の拼音の「[r] (= [z])」とされ()の中だけは国際音声字母であり、且つすぐ下に、この音は「満洲語文語では[ʒ]」だとされている。北京語の拼音と国際音声字母の混乱ばかりでなく、複数人の著者間の意見の相違なのか、問題にしている言語の時代差の問題なのか、分らなくなる。

よくある誤植であるが、*ɣ* (Jonesの基本母音第15番) が *ɣ* (gの摩擦音) になっている所が何ヶ所がある。誤植でない *ɣ* の音声記号も用いられているだけに厄介である。

1. 2 k, g, h と u, ū との音声および音韻論的解釈

以下、メレンドルフにより「*ū*」に転写される、満洲文字で髭の附いた「*u*」は、「*ū*」で表記する。

満洲語文語の音韻論で問題の箇所である。12頁の記述によると、問題の母音「*ū*」は、「音声」としてはやや広めの[u]であり（以下本稿ではこのやや広めの[u]の音声記号として[u]を用いる）、これは陽性子音（奥寄り）の *k g h*、即ちそれぞれ [q ɕ ɣ]、と結合した時に現れる音素 /u/ の異音に過ぎない。この同じ音素 /u/ が陰性子音（前寄り）の *k g h*、即ちそれぞれ [k ɡ x]、と結合した時は、広くない[u]の音価を持ち、髭のない満洲文字「*u*」で書かれる、という至極穏当な見解が述べられている。例えば、[qu] という音節と [ku] という音節があり、それぞれ *kū ku* と満洲文字で書かれているが、その [q] と [u] (*ū* と *u*) は、同一の母音 /u/ が直前の子音のせいで違う音に実現しているに過ぎない、という訳である。

ところが20頁の「*k, g, h*の発音」の記述は私にはよく理解できない。ここでは陽性子音 *k g h*、即ちそれぞれ [q ɕ ɣ]、と陰性子音 *k g h*、即ちそれぞれ [k ɡ x]、の間の「三対の子音間の関係は、たとえば母音字母 *u* と *ū* の関係と同様で、一つの音

素の二つの異なった変異音である。その変異音の相補分布の条件は接続する母音の属性によって区別がなされている」とされている。即ちここでは、音節[qu]と[ku]（満洲文字でkûとku）の[q] [k]の違いは後続母音[u]によって齎されるに過ぎず、[q]と[k]は同一の音素/k/の変異音だと言っている。

12頁で[u]も[u]も同一の音素/u/に該当するとし、20頁で[q]も[k]も同一の音素/k/に該当するとすると、音節[qu]と[ku]（kûとku）は共に/ku/に該当している訳で、どうして2種類の異なった音声に実現するのか分らなくなる。この2種類の音節が区別されている（弁別的）ならば、少なくとも子音か母音のどちらかは2種類の区別のある音（音素）でなければならない。そうでなければ、例えば、sukû（皮）とsuku（蓬）はともに/suku/で区別がなくなり、hûru（竹口琴）とhuru（丘 etc.）も共に/huru/で区別が無くなってしまう。

「皮」と「蓬」なら/suqu/と/suku/のような区別か、/sukʷ/と/suku/のような区別かでなければならない。私は前者の解釈がよいと思っている。20頁の記述は何かの勘違いであろう。或は、音韻の区別ではない何か神秘的な区別で、「皮」は陽性語（suku [+masculine]）で、「蓬」は陰性語（suku [-masculine]）、といった形態論的区別符でも附いている、とするのであろうか。

1. 3 hとh'の音価

本稿ではメレンドルフの記号「'」は、引用の箇所でも「'」を用いる。「'」はすべてIPAに従い気音aspirationを表すことにする。

27頁の最終の2行に、陽性子音の「h[χ]は現代音も文語音も同じで、日本語のハ行音とは異なり、喉の奥で調音されて発音される」とあり、57頁中央にk'a, g'a, h'a「の音は軟口蓋音すなわち[k'a], [ka], [xa]であり、漢語の軟口蓋音の発音部位と同じである。」ka, ga, ha「の音は、口蓋垂音、すなわち[q'a], [qa], [χa]であり、漢語の卡、嘎、哈の発音部位とは異なっている」とあるが解せない。

まず日本語のハ行子音の音声は後続母音によって様々な音価になるが、ハの子音は、少なくとも東京方言の場合、音声字母[χ]で表すのに相応しい音である。[ka]の[k]を摩擦にして[xa]と発音すると、日本語としては非常におかしな音になる。私の姓は[χajata]であり[xajata]ではない。そもそも[χ]は日本語の「ハ」の子音、

北京語の「哈」「好」等の子音、満洲語（少なくとも錫伯語）のhaの子音のような「喉の奥で調音されて発音される」音声を表す音声記号である。ロシア語のxaの子音のような軟口蓋の[x]とも、英語のhotや朝鮮語のhadaのhのような喉頭の[h]とも違う。日本語の「へ」の子音は通常[h]である（へは強めると[xe]になることがある）。即ち満洲語のk'a, g'aの音は軟口蓋音すなわち[k'a], [ka]～[ga]であり、「漢語の軟口蓋の発音部位と同じである」が、h'aの音の調音点は漢語の、例えば<哈>の音の発音部位と同じではない。現代の錫伯語の発音もそうであり、また清朝時代の満洲文字資料で漢語の「哈」「何」に当る音も、それぞれh'a h'oでは表されておらず、ha hoで表されている。『満文金瓶梅』に「韓道國」han'-doo-guwe（n'は附点のn）（180例）、han-doo-guwe（42例）、「何千戸」ho-ciyan-hû（98例）等幾らでも例があるが、h'a h'oの如きh'の文字の実際の使用例は、管見の限りでは、絶無である。58頁の字形の表にも用例は載せられていない。tulergi hergenのh'は、他のk' g'を作った際に統一的に作っただけで、実際に使われる機会のない文字であった。強いて使うとすれば、ロシア語のxa xoの音を表すのに使えるかもしれない。

2. 文法篇

79頁、「名詞の後にgubci, ... を附して複数を表すことがある」として、「booi gubci 全家」とされている。『満文金瓶梅』のbooi gubciはすべて《うちじゅう》《一家を挙げて》の意味で使われており、gubciの附いた名詞booの複数ではないが、『満文金瓶梅』以外のことは分らない。

92頁■4 「次の語の前には必ずbeが用いられる」としてdahameが挙げているが、満洲語訳の『三国志通俗演義』ilan gurun -i bitheでは、名詞に続く時はde dahame或はbe dahameで、名詞形容詞および形動詞に続く時はbeもdeも無しでdahameが続く（tuwaha dahame, tucike dahame等）、という区別が概ね守られているようである。『満文金瓶梅』でもde dahameの例やdahameが助詞無しで形動詞に続く例が、満洲語訳の『三国志通俗演義』ほど多くはないが、見られる。

100頁■9にanggala, dabala, jakade, onggolo, unde「の前の動詞の活用語尾には必ず

-ra etc. が用いられる」とされているが、dabalaの前に-ha -he -hoが来ている例が『満文金瓶梅』では82例は有る。勿論-ra -re -roの方が多く、こちらは245例を数える。

103頁2行目のtucibufiが気になる。「gurun i joboro yadahûn sargan akû niyalma de sargan gaikini, hûda bu seme, ku i ulin be **tucibufi**, sargan akû niyalma de salame buhe. (T. S. X. 3) 国の苦しみ貧しくて妻のない人に妻を娶るように、代価を与えよと、庫の財貨を出させ、妻のない者に分配して与えた」(強調は早田)とある。『満文金瓶梅』で見る限り、tuci-は自動詞「出る」が普通で、tucibu-は他動詞「出す」である。そしてmenggun tuci-もmenggun (be) tucibu-も用例は沢山ある(menggun以外にjiha, yasa -i muke等もある)。『満文金瓶梅』では、menggun tuci-《【直訳】銀が出る》は《出費する》のようなやや抽象的な意味であり、menggun (be) tucibu-《【直訳】銀を出す》は、具体的即物的な《銀を(懐, 財布, 庫などから)取出す》の意である。従ってこの文を『満文金瓶梅』的に解すれば、《...庫の財貨を取出して(或は、持出して)》になるが、檔案の満洲語である以上、何とも言えない。

107頁■6 概数表現のfuncemeとisimeについて「それぞれ「～あまり」, 「～近く」の意を示す」「buya baising orin isime bi. (異. 下. 8a) 小さな町が二十近くある」とされている。日本語で「*n*近く」というと通常*n*を下回る概数, 最大で*n*という所かと思われるが(方言差があるかもしれない), 満洲語のisimeは*n*前後で, 上回っても下回ってもよい。『満文金瓶梅』では原漢語のやや上回りがちな表現をisimeで訳しているようである。これが満洲語訳の『三国志通俗演義』になると原漢語との誤差は相当なもので, どうせ概数だからということなのか, <數十>も<十数>もjuwan funceme, juwan isimeで訳されている例でいっぱいである。(詳細は略すが, 原漢文は岸田文隆氏(1995)が満文訳の底本であると突止められた嘉靖壬午(1522)刻本の『三国志通俗演義』による。)

114頁□14 -tala/-tele/-toloにおいて, isi-《及ぶ》にこの語尾が附いたisitalaと, o-《なる》にこの語尾が附いたotoloとについては, 説明があった方がよいと思われる。巻末の小辞典に, isitalaは「ad. ～に至るまで, ～に及ぶまで, ～に及ぶ, ～に至る」となっており, otoloは「post. ～の間, ～のうちに, ～に到るまでに(ombiの終局連用形)」となっている。isitalaとotoloで品詞の違うことについても

説明が欲しいが、実際の意味・用法として *isitala* はこれで良いとして、*otolo* については、《～になっても（まだ…しない、しなかった）、～になつてやつと（…する、した）》と言いたい。これも飽くまで『満文金瓶梅』中での用法であるが。

119頁 いわゆる不規則動詞の副動詞（連用形）に関して「-*pi*と-*fi*の文法上の意味には区別がある」とされ、それは「およそ-*pi*を語尾とする動詞は」「ことごとくすべて程度状態を表す動詞である」（120頁）から、ということらしいが、いささか問題である。同一の動詞の語幹に-*pi*も-*fi*も附いて、-*pi*が附いた時には或る文法的な意味を表し、-*fi*が附いた時には別の文法的な意味を表してはじめて-*pi*と-*fi*の文法上の意味に区別があることになる。しかし、この場合は（多少の動揺はあるにせよ）或る動詞には-*pi*が付き、或る動詞には-*fi*が附くのであるから、所詮その意味（程度状態であるか否か）というのは各動詞（語幹）の持っている意味であり、-*pi*なり-*fi*なりの文法的な意味の違いではない。これは動詞の語彙的な区別に過ぎない。そういう「程度状態」の動詞は-*pi*が附かないとき、例えば-*mbi*が附いたときでも「程度状態」を表す筈であるから。

133頁 動詞語幹に附く派生接尾辞 ■4 -*ji*-, ■5 -*na*/-*ne*/-*no* の所。前者の-*ji*-は「（ある事を行なうために）来る」とか、「（ある事を行ないつつ）来る」という意味を表す」という。

単語の例として次の例が挙げられている。

<i>alanjimbi</i>	告げに来る	<i>banjinjimbi</i>	暮しに来る
<i>benjimbi</i>	送って来る	<i>fonjinjimbi</i>	問うて来る
<i>gajimbi</i>	取って来る	<i>isinjimbi</i>	近づいて来る
<i>tacinjimbi</i>	学びに来る	<i>wasinjimbi</i>	下りて来る

ここの例の中で、まず-*ji*-の前に*n*の無い形が一つだけ有る。*gajimbi*であるが、*ga*-という動詞語幹は無い、その上、この動詞には「取って来る」の他に「取りに来る」の意味もあり、また通常の命令形の他に意味のかなり違う*gaji*もある。この動詞は*gai*-の派生語だったのであろうが、共時的には既に形から言っても意味から言っても*gaji*-という一次語幹であり、ここに入れのは適当でない。また*benjimbi*も一次語幹が*be*-である動詞は無い。これは*bene-n-ji*-が*benji*-に縮約したも

のであろう。やはりbenji-で一次語幹とすべきであって、ここに入れるのに相応しくない。benji-とgaji-を除くと、これらの形は動詞語幹に-n-を介して-ji-が附いていることになる。次に、訳語として「～に来る」と「～て来る」があり、それは入替え可能ではない（「告げに来る」のは「告げて来る、告げつつ来る」のではないし、「下りて来る」「下りつつ来る」のは「下りに来る」のではない）。従って、二つの意味を「とか」で結んで説明するのは問題である。これには一般に動詞を「移動動詞」（「近づく」「下りる」等）と「非移動動詞」（「告げる」「学ぶ」「暮す」「問う」等）に分けて説明する必要がある。移動動詞（語幹）に-n-ji-が附いた時には「～しつつ来る、～して来る」になり、非移動動詞（語幹）に-n-ji-が附いた時には「～しに来る」になると考えられる。上の例の中の非移動動詞「問う」から派生した「問うて来る」（「訊いて来る」）には日本語の問題が絡んでいる。意味は「問いに来る」「訊きに来る」である。「問いつつ来る」のではない。-n-ji-の-n-はおそらく副動詞（連用形）語尾-meの弱化縮約したものであろう。

次の-na-/-ne-/-no-は、「（あることを行なうために）行く」という意味や「（あることを行ないつつ）行く」という意味を表す」という。その単語の例として以下のものが挙げられている。

acanambi	会いに行く	afanambi	戦いに行く
amcanambi	追って行く	isinambi	近づいて行く
simnembi	行って試験する	tuwanambi	見に行く
tuhenembi	落ちて行く		

まず-ji-の時と違うのは、一次語幹と語尾-na-/-ne-/-no-との間に-n-の無いことである。これは本来、例えば、aca-me-na- > aca-n-na-のように-ji-と平行の現象であったものが、-n-n-という満洲語では許されない子音連続が出来ることからnが一つになっているものと考えられる。ここの例でも「に行く」と「て行く」が混在しており、さらに「行って...する」まで入っている。次のように整理できよう。

上の例の中の移動動詞は「追う」「落ちる」「近づく」であり、「追いつつ行く、追って行く」「落ちつつ行く、落ちて行く」「近づきつつ行く、近づいて行く」

になる。非移動動詞は「会う」「試験する」「戦う」「見る」であり、それぞれ「会いに行く」「試験しに行く」（「行って試験する」ではない）「戦いに行く」「見に行く」になる。即ち-n-ji-と同じく、移動動詞（語幹）に-na/-ne/-no-が附いた時には「～しつつ行く、～して行く」になり、非移動動詞（語幹）に-na/-ne/-no-が附いた時には「～しに行く」になると考えられる。すべて『満文金瓶梅』での話である（早田1995）。

143頁■6の例文2, 149頁■4のjalinについては述べるべきことが多く、別稿に譲らざるをえないが、ごく僅かの点にだけ触れる。よく「ために」と訳されるが、日本語の「(の) ために」は、本来的には「～の利益になるように」即ち利益目的とでもいうか、英語のfor the sake ofの如きものであった。現今では「雨のために中止した」のように既に「原因・理由」にも用いられているが、この原因用法に今なお抵抗を感じる向きも無いとは言えない。いずれにせよ「(の) ために」と訳するのは、その日本語の曖昧性を利用したものであるが、大切なのは、満洲語のjalinの用法であり、漢語の＜爲＞の用法である。現代の錫伯族の人は、jalinは「目的」でなく寧ろ「原因」だ、と言っている。単純に目的か原因か、或はその両方か、というようなものでもない。漢語の＜因爲＞は「原因・理由」と言ってもよいであろうが、＜爲＞は、少なくとも現在では、「目的」にも「原因・理由」にも用いられている。jalinもこれに近いから曖昧な「(の) ために」でよいのだ、というのも如何なものであろうか。例の多いjalin baniha bu-はともかく、もっと例の多いjalin jobo-等は「のために」ではまずい。そもそもjalinの意味は何だ、と問うこと自体に問題がある。英語のforはどういう意味だ、ofはどういう意味だ、と言っても漠然とした答か、多様な「意味」が出てくるだけである（実際の英語の辞書には、多様な「意味」を書いているが）。jalin jobo-はどういう意味だ、jalin baniha bu-はどういう意味だ、となら問える。結局大切なのは、動詞jobo-の対象はどう表現するのか、動詞句baniha bu-の対象はどう表現するのか、後置詞無しなのか、特定の後置詞たとえばjalinを取るのか、ということである。各動詞がどういう後置詞を要求するか、ということ動詞ごとに記述しなければならない。「～に似ている」の「に」の意味を論ずるよりも、「似る」という動詞は「主格」と「に格」の項argumentを取る、という項構造を記述し、動詞と共にその項の意味を記述することが重要なのである。jalinのような後置詞はdeのよ

うな格助詞よりも具体的であるとはいえ、jalin独自の意味を説明しようとするのは、実りが無いのではなかろうか。

3. おわりに

文法篇に続く3.読本篇には檔案も載せられており、私には大変勉強になった。その次の4.満洲語小辞典は、丁寧に『清文鑑』の記述をも考慮されて作られたものと伺える。満和辞典の類の欠をよく補っている。今後常に参照されるものにちがいない。5.索引も便利である。今後満洲語を扱う者は、言語学者であれ史学者であれ、必ず本書を参照しなければならないことになるだろう。入門者にとっては最新最良の教科書であり、専門家にとっては常に振返り、ここが一つの出発点になるものと思われる。失礼な言を多々重ねたが、お許し願いたい。

引用文献

岸田文隆 1995 『「三譯總解」の満文にあらわれた特殊語形の来源』（私家版）

早田輝洋 1995 満洲語文語における「行く」と「来る」——「行く」と「来る」の使い分けの一例——『大東文化大学紀要』第33号 pp.179-197.